石炭産業の盛衰と子どものライフコース

笠　原　良　太

1．はじめに

本報告の目的は、「炭鉱労働者の子どものライフコース」研究の意義と可能性を示すことである。報告者は、とりわけ高度経済成長期の日本において、急速に衰退した石炭産業に注目して研究を進めている。主な着眼点は、家族、教育、ライフコースの 3 点である。炭鉱労働者の子どもは、石炭産業の盛衰のなかで、どのように生活し、どのような教育を受けたのか。そして、彼らはその後、どのような産業・地域に移動したのかについて研究している。

本研究の主な分析資料は、炭鉱労働者の子どもが小学・中学生時代に書いた作文、教育実践資料をはじめとする学校の資料、そして、中高年期に移行したかつての子どもの回顧的なインタビューやアンケートの結果である。こうした資料から、当時の子どものリアリティが浮かびあがる。以下では、具体的な資料を示しながら、炭鉱労働者の子どもの家族、教育、ライフコースについて紹介する。

2．子どもの作文からみる炭鉱労働者家族の生活

まず、炭鉱労働者家族の生活について、子どもの作文からみていこう。労働者家族の生活時間や様式、家族関係などは、フォーマルな調査では把握しづらい。とくに、数十年前の生活を明らかにするためには、そこに住んだ人びとの記憶に頼るしかない。そこで、子どもの作文が当時を知る手がかりになる。なかでも、小学生の作文は、炭鉱住宅（炭住）での家族の生活や親子のやりとりなどが率直に書かれており、貴重な資料である。

たとえば、つぎに示す夕張市内小学校の 1 年生が書いた作文「おとうさん」（1971 年）は、三交代で働く父親のようすを詳細に書いている。

> ぼくは、いつもおとうさんのかおをみないでがっこうにいきます。おとうさんは、いつもかいしゃへいってかえってきてから、すぐねます。だから、ともだちは、いれさしてくれません。だから、にばんがたのときのほうがいちばんいいなあとおもいます。（夕張市立清陵小学校 1971: 1）

炭鉱労働は、基本的に三交代制（一番方 7:00～15:00、二番方 15:00～23:00、三番方 23:00～7:00）であり、週ごとに番方が変更する（三番方→二番方→一番方→三番方…）。対照的に、子どもは、学校の規則正しい時間で生活しており、しばしば父親が睡眠中のため、顔を見ないで登校したり、帰って来ても友だちを家に呼べなかった。上記の作文には、父親が三番方のときのようすが書かれている。ここからわかるように、子どもは、炭鉱で働く父親の睡眠・休養を第一に優先して生活していた。むろん、双方の生活時間を管理していたのは、母親（妻）であった（布施 1976: 29）。炭鉱労働者家族の生活は、厳しく危険な労働をする父親・夫の労働力再生産、生活リズムに強く規定されていたのである。

さらに、子どもの作文から、狭い炭住での生活のようすがうかがえる。つぎの作文は、常磐炭砿があったいわき市の小学 6 年生が書いた「算数のクラス」（1964 年）という作文である。

> 母は決まって「勉強やったのか」という。〔中略〕家に帰って、母にテストのことを話すと、母は「C クラスの一番けつだっぺ」といい、「そんじゃ、高校になんてあがらんにど。いまは、高校にあがってねどいいどこでも働かんにぇんだがんな」と言われた。そういわれてみると、私はいやいやながらまた 6 畳へもどる。（湯本第三小学校 1964: 42-43）

ここでは、「6畳」の部屋が子どもの勉強部屋として使われていたことがわかる。当時の鉱員住宅（炭住）の間取りをみると、六畳二間程度で広くない。子どもの勉強部屋を設けるのは容易ではないが、上記の作文から読み取れるように、それだけ子どもの教育が重要視されていたのである。1960年代は、ちょうど高校進学率が全国的に急上昇した時代である。炭鉱においても、父母は子どもの高校進学とその後の「いいところ」への就職を期待していたことがわかる。

このように、子どもの率直な文章表現から、大人が記した公的文書には残らないような、炭鉱での家族生活や親の教育観、方言などを知ることができる。

3. 教育資料・元教員インタビューからみる炭鉱の学校・教育

つづいて、炭鉱の学校・教育についてみていく。産炭地の小中学校は、「炭鉱の学校」と呼ばれるほど炭鉱と密接な関係があった。校名に炭鉱や会社名が入る場合もしばしばである（尺別炭砿小・中学校、住友赤平小学校など）。炭鉱会社は、炭鉱の開発と同時に学校を設立し、次世代労働力の養成と流動的な炭鉱労働者の定着を図った。学校は炭鉱コミュニティの中心であり、学校教育だけでなく、社会教育の場でもあった。そして、学校行事は全山の人びとが集う行事であり、学校は文化の中心だった。教員たちも、炭鉱会社・父兄・地域住民の支持・期待を受けて、生活綴方や進路指導、PTA活動など、独創的かつ先進的な教育実践をおこなった（笠原 2018, 2020）。

炭鉱の学校は、あらゆる階層の子どもが集まる場所である。職員・鉱員・組夫といった炭鉱諸階層に加え、商店・自営、公務員・教員などの文化を知ることができる。そのなかで、学校は「平等」を謳うが、子どもの中卒後進路をみると、階層差が明確に残っていた。本社職員の子どもは、高校・大学と進学する傾向にあったが、家庭の経済状況が厳しい鉱員・組夫の子どもは、高校進学も断念しなければならないケースもあった（笠原 2020, 2023）。

さらに、炭鉱に特徴的な学校として、鉱業学校や准看護婦養成所などの企業学校がある。企業学校は、義務教育課程を修了した従業員の子どもが対象で、男子は鉱業学校、女子は准看護婦養成所や洋裁学校に通った。これらの企業学校は、国内の主な大手炭鉱に設置され、若年労働力の養成に大きな貢献を果たした。とくに鉱業学校は、素性の知れた従業員の子どもを将来の中堅技術者として養成するため、会社が奨学金を支給するなど、手厚く支援した。たとえば、北海道釧路の太平洋炭砿鉱業学校の募集要項（1964年）をみると、入学資格は「原則従業員子弟」の「中学卒業見込男子」、入学金は無料、奨学金（月額）は1年生3,500円、2年生4,000円、3年生5,000円が支給された（笠原 2019）。1960年代後半には、高校進学期待の高まりに応じて、大手炭鉱各社は校名を「高等鉱業学校」と改め、通信教育制度を導入し、卒業・入職後1年で高卒学歴の取得を可能とした。しかし、石炭産業の急速な衰退によって次第に志願者数が減少し、1970年代半ばまでにほとんどの鉱業学校が閉校した（笠原 2021）。

4. 小中学生の作文集からみる炭鉱の事故・閉山と子ども

そして、子どもが炭鉱の事故や閉山をどのように経験したのかについて、当時の小中学生による作文集から読み取ることができる。炭鉱で大きな事故や閉山が生じると、山元の学校や子供会などで文集が編まれた。現在、その多くが各自治体の教育委員会や図書館、元教員をはじめ個人宅に所蔵されている（笠原 2017）。

たとえば、最大の炭鉱事故となった三井三池炭鉱三川坑の炭塵爆発事故（1963年）に関する文集『私達の叫び』が新港町社宅の子供会「炭っ子」によって編まれている。表紙には以下のように記されている。

> 今でも震えが止まらない／あの音！／あの声！／あの顔！／あの姿／二度と繰り返したくない／こんな社会を許しておけない／さあ、／一人一人の斗魂に火をつけよう（炭っ子グループ 1963: 2）

「炭っ子」は、三池闘争（1959-60年）時に結成された子供会であり、指名解雇者の子どもも含まれていた。上記の文集に含まれている「組合は一つに」という作文では、高校1年生の男子が「1. 合理化はほどほどに

して『保安』の確保！／2. 差別はするな！／3. 組合は一つになって会社の弾圧をはねかえせ！」と訴えている。

このほか、北炭夕張新鉱ガス突出事故（1981 年）に関する文集『その日父は帰らなかった』、三菱南大夕張炭砿ガス爆発事故（1985 年）に関する文集『炭鉱っ子』など、大手炭鉱の大災害に関する文集が注目を集めた。文集全体をみると、犠牲者の子どもがもっとも深刻な影響を受けた一方、そのほかの子どもも産業・地域・家族の将来に対する不安を抱くなど、少なからず影響を受けていたことがわかる（笠原 2017）。

さらに、山間や島の炭鉱では、閉山が地域の崩壊をもたらし、子どもに深刻な影響がおよんだ。たとえば、1970 年 2 月に閉山した北海道釧路の尺別炭砿（雄別炭砿社）では、閉山から半年で全人口の 4,000 人が転出し、炭鉱街が消滅した。当時の中学 3 年生は、閉山直後の作文につぎのように記している。

> よりによってなんで自分達が 3 年の時、高校受験の時にあたるなんて。〔中略〕親が自分のことを、より以上に、気をつかってくれていたのだ、と知った時には、さすがのおれも心にガツンとくるものがあった。〔中略〕／「閉山」というものは、人の人生を大きく変えてしまった。〔中略〕／まちがって高校に入れたら、心期一転、心を入れかえて、青にさいにならぬよう勉強にはげもうと思う。（1970 年 3 月、原文ママ）

上記の作文からわかるように、閉山を経験した学年によって、直面した課題が異なった。中学 1・2 年生は、転校による友人との別れ、都会の学校への適応などに対する不安を吐露していた。一方、義務教育課程修了直前の中学 3 年生は、進路に関する深刻な不安を述べていた。尺別炭砿が閉山した高度成長後期、石炭産業の漸次的撤退期の閉山は、離職者の再就職・産業転換はおおむねスムーズに進行したが（嶋﨑 2018）、父親の再就職決定のタイミングが少しでも遅れたり、再就職先の産業・地域への適応が難しい場合、中学 3 年生は進路変更（高校進学断念・就職、志望校の変更など）を余儀なくされたのである（笠原 2022）。

5. 一次資料と回顧的データからみる炭鉱労働者の子どものライフコース

このように炭鉱の事故や閉山を経験した子どもは、その後、どのような人生を辿ったのか。当時の経験をどのように意味づけているのだろうか。彼らの主な転出先の地域には、現在、「東京尺別会」「札幌夕張会」などの同郷会や同窓会が組織されている。これらの会を通じた調査によって、炭鉱の事故や閉山による中長期的影響を把握できる。

上記でみた尺別炭砿の子どものその後をみると、閉山当時の父親の年齢・職位・就業状況によって影響が異なった。父親が比較的若く、早期に再就職・産業転換した場合、都会に転出した子どもは、転校先への適応に苦戦しつつも、新たな一歩を踏み出すきっかけになったと、肯定的に評価していた。一方、父親が高齢や病気等で再就職が遅れ、道東にとどまった子どもは、高校・大学等への進学を抑制されるなど、閉山による中長期的影響がみられ、長く疎外感や取り残された感覚を抱いた。

尺別炭砿閉山当時、中学 2 年生だった男子生徒の例をみよう。彼の父親は閉山当時、病気のため休職中だった。彼は閉山直後の作文に「授業中の態度が乱れていることをすべて閉山のせいだの一言で終らせてしまう、それではあまりに簡単すぎる」（1970 年 3 月）と毅然とした内容を述べていたが、実際は先を見通せない状態に不安を抱き、閉山前後から「帯広に引越しで到着するまでの記憶がない」ほどであった。転校先では勉強や部活に力を入れ、炭鉱での生活経験や人間関係、記憶をすべて忘れて距離をとることで適応できたが、高卒後の進路では、家族の状況を考慮して大学進学を断念せざるをえなかった。閉山から 50 年後、高齢期に移行した本人に閉山時の作文を見せると、彼はつぎのように述べた。

> この作文は強く書いてるけど、ほんとは不安で不安で。だから、この時点で、尺別は捨てたんだな。悲しくて、悲しくて、捨てるしかなかった。強がり。だけど、忘れる方法もあるっていうことを、子どもながらに知っていて、そうしないと、やりくりできないという状況だった。（2017 年 8 月）

このように、閉山直後に彼が書いた毅然とした作文は「強がり」であり、深刻な不安の裏返しだった。彼は高齢期に移行してもなお、当時の取り残された感覚や社会に対する不平・不満を抱き続けていた。当時の一次資料だけではわからない潜在的な心境や忘却していた記憶を、作文執筆者へのインタビュー調査によって知ることができた。この2時点データの分析は、閉山時の子どもの心境の変化、閉山の意味づけを知るうえで有効である。

こうした調査が可能なのは、かつての「炭鉱の子ども」が、同郷会や同窓会で「ヤマの絆」を現在にかけて持続しているためである。炭鉱での記憶は、炭鉱の現役世代に限らず、その子ども世代に継承されている。同郷会・同窓会は、まるでかつての「炭鉱の学校」のように、職員・鉱員・組夫の子どもと小中学校の恩師まで参加し、炭鉱での生活について振り返り、望郷の念を共有し、意味づけをおこなっている。半世紀経ってもなお世代を越えて持続する「ヤマの絆」は、われわれに人びとの「つながり」とはなにかを問いかけてくる（嶋﨑ほか 2020）。

6. おわりに

本報告では、報告者が取り組む「炭鉱労働者の子どものライフコース」研究の意義と発展可能性を、具体的な資料をもとに提示した。炭鉱労働者の「子ども」への注目によって、産業・労働の特性が労働者のみならず、その家族・子どもの生活やライフコースにも影響をおよぼしていることがわかる。産業・労働社会学と家族社会学、教育社会学など、隣接する学問領域の垣根を越えて、相互に参照し、研究を展開する必要性が浮かび上がってくる。むろん、産業・労働と家族・教育・ライフコースの関連は、石炭産業に限らず、ほかの産業でもみてとれる。今後、他の産業転換や大規模工場の倒産などを経験した子どものライフコース研究へと展開していく必要がある。

そして、「炭鉱労働者の子どものライフコース」研究は、グローバルな展開が可能である。炭鉱は世界共通語であり、台湾、韓国、中国、ベトナムなど東アジアの産炭地、欧米各国の産炭地との比較が求められる。これまで訪問した海外の産炭地にも、日本と同様、子どもの作文集や学校の資料が多く残されていた。今後、これらの資料を収集し、炭鉱労働者の子どもへのインタビュー調査を重ねていき、「炭鉱労働者の子どものライフコース」研究を展開していきたい。

参考文献

布施晶子，1976，「賃労働者層の労働－生活過程と家族の構造・機能――炭鉱労働者三層（職員層，鉱員層，組夫層）の家族の比較を中心とする実証的研究」『社会学評論』27(1): 18-55.

笠原良太，2017，「石炭産業研究における作文資料の可能性と課題――炭鉱での生活，事故，閉山に関する小中学生の作文を事例に」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌＝ WASEDA RILAS JOURNAL』5: 109-121.

――――，2018，『尺炭教育史――尺別炭砿地域における独創的な教育実践の記録』（JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー Vol.15　全 56 頁）.

――――，2019，「太平洋炭砿での暮らし」嶋﨑尚子・中澤秀雄・島西智輝・石川孝織編『太平洋炭砿――なぜ日本最後の坑内堀炭鉱にないれたのか　下巻』釧路市教育委員会，55-90.

――――，2020，「炭鉱の学校と『学縁』――子どもたちの〈つながり〉」嶋﨑尚子・新藤慶・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史――尺別炭砿閉山とその後のドキュメント』青弓社，88-103.

――――，2021，「なぜヤマの子どもは炭鉱マンになったのか――鉱業学校の展開と世代間継承」『家族社会学研究』33(2): 204-211.

――――，2022，「石炭産業の漸次的撤退と閉山離職者の子どものライフコース――雄別炭砿株式会社尺別炭砿の閉山と中学生に関する追跡研究」早稲田大学文学研究科博士学位論文.

――――，2023，「炭鉱の学校と子ども」嶋﨑尚子・西城戸誠・長谷山隆博編『芦別――炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』寿郎社，158-173.

嶋﨑尚子，2018，「炭鉱閉山と家族――戦後最初のリストラ」中澤秀雄・嶋﨑尚子編『炭鉱と「日本の奇跡」――石炭の多面性を掘り直す』青弓社，80-103.

嶋﨑尚子・新藤慶・笠原良太・畑山直子，2020，『〈つながり〉の戦後史――尺別炭砿閉山とその後のドキュメント』青弓社.

炭っ子グループ，1963，「私達の叫び !! ――三池三川坑爆発事故」.

湯本第三小学校，1964，「文集（生活文）」.

夕張市立清陵小学校，1971，『しんこう』.